

学長挨拶文（令和4年4月12日図書館建設工事・上棟式）

昨年4月より、学長職を拝命しております、各務洋子でございます。駒澤大学を代表して、一言ご挨拶を申し上げます。

振り返りますと、令和2年7月10日に新図書館建設の地鎮式が執り行われ、新図書館建設が着工いたしました。以来、およそ1年9か月を経て、上棟式を迎えることができました。

本日は、大変ご多忙のところ、関係各位のご臨席を賜り、永井政之総長のご導師のもと、節目となる上棟式の法要も、滞りなく務めることができました。誠にありがとうございました。

コロナ禍の混迷する社会状況のなか、これまで大きな事故もなく、予定どおりに工事が進捗しているとの報告を受けております。これもひとえに、設計・監理をお引き受けいただいております、株式会社石本建築事務所様、さらに、工事施工をお引き受けいただいております、東急建設株式会社様の真心のこもった高度な技術と技能の結晶の賜物と、この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

さて、かつて「禅籍では東洋一」ともいわれた、本学図書館の歴史は、地鎮式での前学長の挨拶のとおりでございますが、古くは

「駒澤大学」の前身である、明治時代の「曹洞宗大学林」にさかのぼり、現在の駒沢の地では、当時「耕雲館」と称された図書館が、今は「禅文化歴史博物館」としてその面影を残しております。

現在の図書館は、今から約半世紀前の昭和48年に建設され、以来、書籍の収蔵のみならず、デジタル技術を取入れた「貴重書のアーカイブ」や「論文のデータベース化」などにも努め、時代に応じた教育研究に貢献して参りました。

こうした歴史を受け継ぐ新図書館は、近年の大学図書館に求められる、多様なニーズに応える施設とするため、一つに「智の蔵」、二つ目に「フロアゾーニング」、三つ目に「多様な閲覧スペース・学修空間」の3つのコンセプトを主軸に据えています。

これらは、私が掲げております「デジタル化の推進とダイバーシティの尊重」にもつながる、重要なコンセプトでもございます。

本年、開校140周年を迎える駒澤大学のさらなる教育研究の高度化と、図書館内に蓄積される「大学の知」を日本のみならず広く世界へも発信する新たな学術拠点になると確信しております。

引き続き、今年10月の新図書館開館に向けて、仕上げの工事が行われることと存じます。関係各位には、格別のご理解とご尽力を賜りますようお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。